庄内から広がる森づくりの輪～出羽庄内公益の森づくりを考える会～

山形県庄内総合支庁森林整備課　技師　伊與田（いよた）　朱美（あけみ）

1　はじめに

山形県庄内総合支庁では、平成１３年度の当研究発表で「庄内砂丘海岸林における住民参加の保全活動について」という題名で発表している。当時、地域の共有財産である庄内砂丘の海岸林を、地域の力で守り育てようという住民の意識が徐々に高まってきていたため、当時の現状と課題について事例発表したものである。その後、平成１４年度から、多様な主体の協働による海岸林保全の仕組みづくりをめざす「出羽庄内公益の森整備事業」を、庄内総合支庁独自の事業として実施した。そこで、平成１３年度当時の課題を振り返り、４年経過した当事業を評価し、成果や課題について考察した。

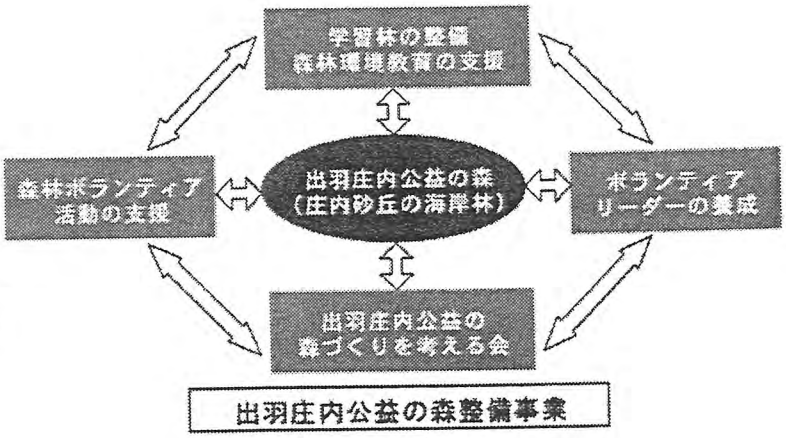
2　「出羽庄内公益の森整備事業」の背景

山形県の日本海側に位置する庄内砂丘は、延長３３ｋｍ、面積約２，５００ｈａのクロマツの海岸砂防林に覆われている。この海岸林は、飛砂を防ぐために造成されてきた歴史的な遺産であり、庄内平野を守る盾となり、現在も庄内地域の暮らしや産業の基盤となっている。

かつて、飛砂と洪水を防ぐために１８世紀から始められた植林は、世代を超えて引き継がれ、苦難の末に広大な砂防林が形成された。しかし、第二次世界大戦前後の混乱により砂防林は再び荒廃し、飛砂の脅威が復活した。そして、戦後の砂防植林の結果、ようやく近年になって現在の海岸林の原型ができたのである。ところが、高度経済成長と燃料革命により、人々の暮らしは森林から離れ、森林の手入れ不足が顕著化。そして昭和５４年に庄内に侵入した松くい虫被害は、現在も容易に終息せず、平成１０年１１月の大雪害や、平成１６年の台風による風倒被害など、幾多の危機を乗り越えながらも、その雄大で特徴ある森林景観をとどめ今日に至っている。この海岸林を保全して後世に引き継ぐため、庄内総合支庁では、これを「出羽庄内公益の森」として位置づけ、平成１４年度に「出羽庄内公益の森整備事業」を創設した。

3　出羽庄内公益の森整備事業

当事業は、（１）出羽庄公益の森づくりを考える会、（２）森林ボランティア活動の支援、（３）ボランティアリーダーの養成研修、（４）学習林整備と森林環境教育の支援の４つの柱から成り、それぞれが相互に関係して成り立っている。



(1)出羽庄内公益の森づくりを考える会の開催

庄内砂丘は2市1町にまたがり、さらに森林は国有林と民有林に分かれている。しかし、例えば海岸林が抱える最大の課題である「松くい虫」の被害などは、行政上の境界は関係なく発生するものであり、課題解決のためには、関係機関が連携し、一体的、総合的な取り組みをしなければならない。このため、従来の行政機関や林業関係団体だけでなく、幅広い多様な主体が、並列の関係で同じテーブルにつき、庄内砂丘の海岸林保全という共通の課題に向かって、情報や意見を交換し、今後のあり方について話し合う「出羽庄内公益の森づくりを考える会」を年3回のペースで開催している。

(2)森林ボランティア活動の実施、支援

庄内砂丘の海岸林における森林整備ボランティアは、平成１０年の遊佐町立西遊佐小学校のクロマツ植林や、平成１１年の酒田市立十坂小学校の植林や枝打ちの活動がさきがけである。十坂小学校の活動を市民レベルに広げるため、酒田市と庄内総合支庁は、光ヶ丘地区と飯森山地区を拠点としたボランティア行事を、平成１２年度から毎年行っており、市民に定着した活動となってきている。また、遊佐町では砂丘地砂防林環境整備推進協議会という地域の住民団体が主体となり、平成１３年から毎年、森林整備ボランティアを実施している。ボランティア活動が大規模化すると、ヘルメット、のこぎり、かま等の機材や、指導スタッフが必要になる。また、枝打ちをした後には大量の枝が残り、後始末が必要になる。そこで、当事業では、このようなボランティア活動の企画や、指導スタッフの派遣、機材の貸与、残材のチッパーによる破砕処理等の支援を行い、庄内地域で高まってきた住民参加の森づくり運動を応援している。

(3)ボランティアリーダー養成研修

森林整備ボランティアは、かぶれ、虫ささされや蛇など、様々な危険と隣り合わせの活動である。しかも、下刈り鎌や枝打ち鋸などの刃物を使う。このように危険できつい作業だが、何のためにするのか、どんな森林にしていくのか、といった活動の意義を自覚して行うことで、より充実感と達成感を得ることができる。ボランティアリーダーは、住民参加の森づくり運動を支える人材として、参加者の安全確保や、作業方法の指導だけでなく、森づくり活動の意義を広く市民に伝えていく重要な役割を担っている。そこで、当事業では、ボランティアリーダーの養成研修を実施している。受講者は、住民団体、教職員、大学生、行政関係や森林組合の職員など多様である。 大規模なボランティア活動を、事故なく整然と行うためには、多くのリーダーの協力が欠かせない。

(4)学習林整備と森林環境教育の支援

庄内砂丘に位置する学校にとって、海岸林は格好の環境教育の場である。身近な森林を、所有者や地域の協力を得て「学習林」として設定すれば、そこで地域の歴史を学び、様々な森づくり体験や自然観察などの学習活動を行うことができる。当事業では、「学習林」を平成１４年度から3年間毎年2校ずつ、計6校に設定した。学習林活動にＰＴＡや地域住民が関わっていくことにより、次代を担う子供を軸として、森林に対する地域の意識が高まっていくことを期待している。また、設定校以外でも海岸林を題材にした総合的学習などが広がりを

見せており、庄内総合支庁では「地域ふれあい講座」という職員の出前講座により、広く学習活動の支援を行っている。

4　事業成果の考察

（1）平成１３年の発表時点での課題

平成１３年の発表時の課題は以下の通りである。

① 参加者の安全確保を第一とすること
② 作業後に充実感、達成感が得られること
③ 作業の内容、目的を理解してもらうこと
④ 森林整備作業に伴う残材の処理

森林ボランティア実施上の課題

⑤ 活動フィールドの確保
⑥ 森林整備技術の習得
⑦ 資機材の確保
⑧ 会員の拡大、参加意識の向上、後継者の確保
⑨ 行政や団体間の情報の交換と連携

住民団体による活動の課題と行政の取り組み上の課題

⑩ 海岸林の区域分け、条件に応じた整備方針の樹立

（2）考察その１　「ボランティアリーダー養成研修」で対応してきた課題

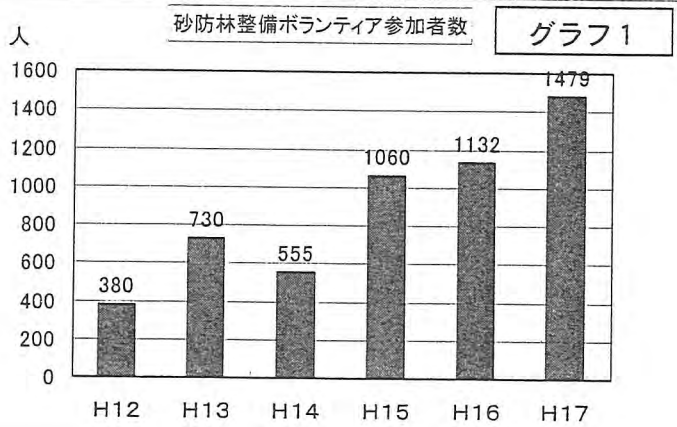
各課題について考察する。まず、①「参加者の安全確保」、②「作業後に充実感、達成感」、③「作業の内容、目的の理解」、⑥「森林整備技術の習得」については、当事業のボランティアリーダー養成研修で対応してきた。チェンソーや刈り払い機の研修会、市民参加のボランティア前の個別研修会、植生や生態系に関する研修、植林の歴史に関する研修、下刈りや枝打ちの技術研修や救急法、松くい虫に関する研修など内容は様々である。ボランティアリーダーは、安全面や技術面で、一般参加者を指導すると同時に、一般参加者が充実感、達成感を得られるように、作業の仕方、見せ方を配慮する必要がある。行政だけでなく、住民団体も独自に研修会を開くようになってきており、各団体のボランティアリーダーの技術や知識は向上しているといって良いと思われる。

しかし、③「作業の内容、目的の理解」について、ある整備作業をすることで将来どういう森林を目指すのか、という点では関係団体、個人個人の間でも意見が分かれるところである。例えば、下刈り１つをとっても、自然に生えてきた広葉樹を刈り残して、広葉樹林への遷移を促すべきと考えるリーダーと、昔の白砂青松を目指し、クロマツ以外をすべて刈り払うべきと考えるリーダーとで、意見が分かれるときがある。⑩「海岸林の区域分け、条件に応じた整備方針の樹立」とあるように、庄内砂丘の海岸林の中でも、めざす森林を色分けし、その条件に合わせて整備方針を変えるべきであろう。これについては、出羽庄内公益の森づくりを考える会の分科会、ゾーニング部会で、議論している最中である。

（3）考察その２　「森林ボランティア活動の支援」で対応してきた課題

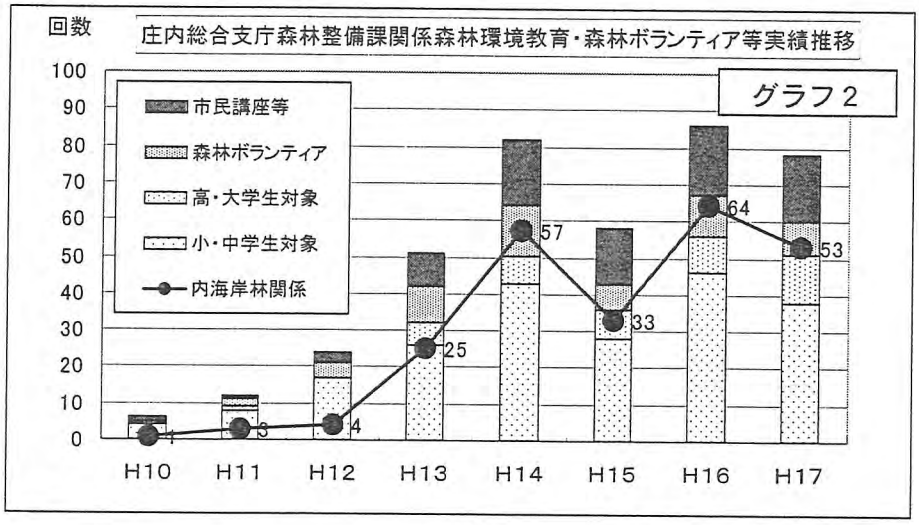
次に④「森林整備作業に伴う残材の処理」は、前述にもあるが、当事業の森林ボランティアの支援として、チッパーシュレッダーという機械で残材を破砕処理することで対応してきた。小学校によっては、枝打ちの後の残材をキャンプの薪として有効利用している。また、

⑦「資機材の確保」についても、森林ボランティアの支援で、草刈り鎌、枝打ち鋸、ヘルメットなどの機材を貸し出している。このように森林ボランティア活動を支援してきた結果、ボランティア参加者数が増加したことは、大きな成果である。



（４）考察その３
「学習林の整備、森林環境教育の支援」で対応してきた課題

⑤「活動フィールドの確保」については、学習林の設定など、環境教育を中心に、庄内砂丘の海岸林の各地で活動を行ってきた結果、活動フィールドが次第に増加してきた。平成１４年度には活動する学校は４校だったが、平成１７年度には１７校になった。グラフ２に、森林環境教育と森林ボランティア実施回数の実績の推移を表したが、環境教育を中心に実績が増えてきている。



(注)H17 は１月末日のデータである。

（５）考察その４　出羽庄内公益の森づくりを考える会で対応してきた課題

⑨「行政や団体間の情報の交換と連携」については、当事業の出羽庄内公益の森づくりを考える会の設立により、非常にスムーズに情報交換や連携が行われるようになった。初年度は、県で関係機関に参加の呼びかけをし、会議を主催したが、翌年の平成１５年からは会則を制定し、事務局を庄内総合支庁に置きながらも、より参加者主体の運営に移行するように努めた。森林ボランティアを行う際にも、当初は行政（県・市）主導で活動を企画し実施してきたが、徐々に「考える会」の参加団体との共催型に移行しつつある。また、平成１６年、１７年には住民団体が主催し、「考える会」が協力して「クロマツシンポジウム」を開催し、海岸林の保全や森林環境教育の取り組みについて広く市民に情報発信し、普及啓発に大きな成果を上げてきている。

（６）考察その５　その他の課題について

⑧「会員の拡大、参加意識の向上、後継者の確保」については、各団体間での差もあり、一概にはいえないが、最も重要な課題の一つとして位置づけられる。会員の高齢化、固定化が課題となっている住民団体もある。活動を継続させるためにも、ボランティアリーダーとな

れる人材、活動の企画・運営が出来る人材を増やし、一定の個人や団体に負担が集中しない仕組み作りが必要である。これは、住民団体だけでなく、行政、森林組合なども同様である。

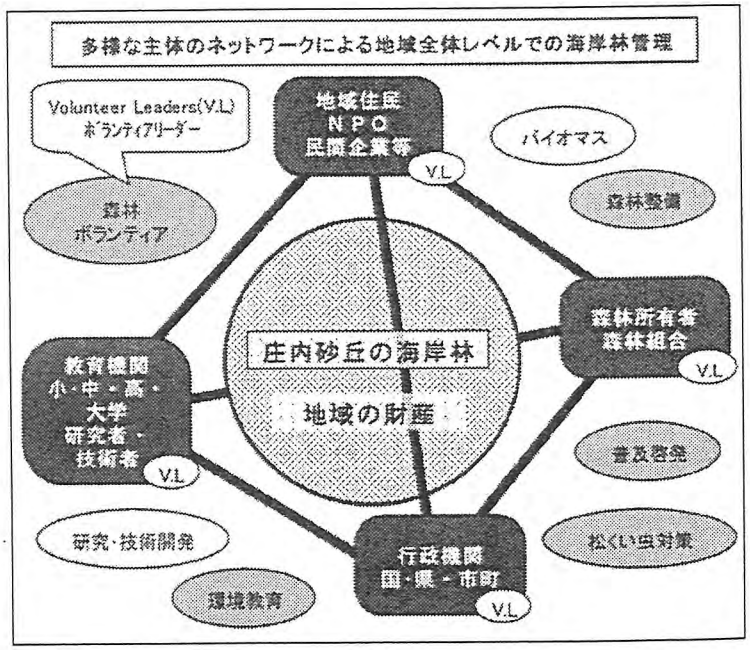
5　今後の新たな課題

ここまで述べた、平成１３年度当時の課題の中には、成果のあがっているもの、今後も引き続き課題としていくものなどさまざまあるが、現在の最大の課題は、「いかにして活動を継続するか」であるといえるだろう。森づくりは長い目で取りかかる必要があり、長期的計画に基づいて行われるべきものである。

しかし、継続することはなかなか容易ではない。特に学習林整備と森林環境教育の支援については、教職員の異動により、積み重ねてきた活動が振り出しに戻ることもしばしばある。同じことは、行政にも言える。対策としては、活動を行う際に、地域住民も巻き込むことで、地域に根付いた活動になるように働きかけている。例えば、学習林活動を行うときには、地区自治会や公民館、地元の住民団体に参加を呼びかけている。一方で、教職員の異動は、悪いことばかりではない。海岸林の学習を経験した教諭が他の学校に転勤することで、今まで活動がなかった学校に、活動の輪が広がることもある。

地域の住民団体が、近隣の学校同士の連携を強めるよう働きかけている例もある。酒田市には「万里の松原」という国が整備した海岸林の管理や活用に、地域住民も積極的に参加するために立ち上がった「万里の松原に親しむ会」という団体がある。同会では、「万里の松原」周辺にある、小学校・中学校・高等学校の五校で「万里の松原学校連絡会」をつくり、会が調整や指導を担うことにより、各校連携して活動を進めており、住民主導型の先駆事例として成果を上げている。

6　おわりに



多様な主体の協働による海岸林保全の仕組みづくりをめざして、山形県庄内総合支庁が行政として実施してきた「出羽庄内公益の森整備事業」であるが、それを支えているのは、行政だけではなく、今や、まさに多様な主体がこの事業を支えていると言って良いだろう。

庄内砂丘の海岸林が持つ歴史的、文化的価値を背景に、森づくりの輪が、地域に定着しつつある。しかし、これは即席で出来上がったものではなく、森づくりと同様に時間と手間をかけて、人と人とのつながりの中で地道に築き上げられてきた輪であり、これからも手入れし、育てていく必要がある。大きくなった樹が土壌に根を張り巡らすように、この森づくりの輪のネットワークを庄内から広めていきたい。